成長の未来図

識者に聞く ④

マサチューセッツ工科大教授 アビジット・バナジー氏

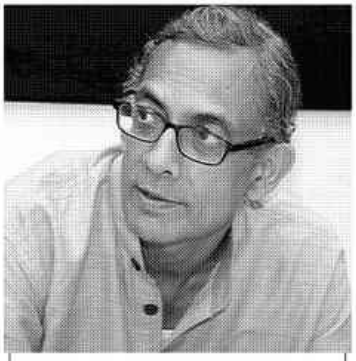
意義ある仕事の供給を

新型コロナウイルスの感染拡大を乗り越え、豊かな経済を築き上げるには何が必要か。2019年にノーベル経済学賞を受賞したマサチューセッツ工科大学（MIT）のアビジット・バナジー教授に聞いた。

――新型コロナは経済成長や資本主義にどのような影響を与えましたか。

「人々の価値観に与えた影響は一様ではない。国ごとにも異なる。発展途上国では住居環境などの要因で在宅勤務ができる人が少なく、経済への打撃が大きかった。かたや先進国ではステイホームによる鬱憤を抱え、暴力に走る人が増えた」

「飲食サービスなどでオンライン産業への移行が進むが、まだ途上だ。最近では米ドラッグストア大手のCVSヘルスが店舗の1割にあたる900店の閉鎖を決めた。オンライン販売に顧客を奪われたことが原因で、今後も多くの雇用が失われかねない。生活に及ぼす影響は大きい」



Abhijit Banerjee　1961年、インド・ムンバイ生まれ。2019年、貧困解消につながる政策の研究でノーベル経済学賞を受賞。著書に「絶望を希望に変える経済学」。21年には料理本を出版。

――国内総生産（GDP）を尺度とした経済成長だけを目指す考え方には懐疑的な立場をとっています。

「人類の豊かさとは何か。誰もが納得する指標を作れるかどうかは分からない。仮に生み出せたとしても、GDPに完全に置き換わることはないだろう。一方でGDPだけを信じるべきでもない。豊かさの捉え方が変わる中、信頼できる指標の再構築が求められている」

「幸福度に注目する専門家もいるが、文化や歴史が違う国の人々に『あなたの幸福度は1から10のどれに当てはまりますか』などと尋ね、単純に比較しても意味がない。国ごとに幸せという言葉に込める意味合いは違うからだ」

――どうしたらいいでしょう。

「もっと心の奥に目を向けるのはどうか。多くの人が精神的な落ち込みを抱えている。幸福度を測る調査でも『先週、ベッドから出たくない日がありましたか』などと突っ込んだ質問をしてみると、人々の精神状態をより的確に把握できるのではないか」

――各国の政府に何を求めますか。

「世界的に広がるうつ病や米国で増え続ける絶望死の背景には失業の問題がある。仕事は人々の生活を支え、アイデンティティーを定義する重要な要素となる。持続的な雇用の確保こそ政府が最優先で取り組むべき課題だ」

「社会的な問題は失業以外に高齢者や子どものケアなど多岐にわたり、同時に解決しなければならない。重要なのは仕事をする中で『意義あることをしている』と実感できることだ。人工知能（AI）の普及により意義ある仕事の供給が減るかもしれないが、（環境関連の）グリーン分野や介護など人力が欠かせない領域はたくさんある」

（聞き手は高橋元気）

掲載日 2022年1月14日 日本経済新聞 朝刊 5ページ ©日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。